

修 士 論 文 要 旨

学籍番号 20GH151

第 号

氏 名 蔡午君

人文社会科学 専攻 (コース: 文化芸術)

論文題目

田村俊子作品における〈弱い〉男たちについて——「木乃伊の口紅」「炮烙の刑」を考える——

田村俊子は主に明治末期から大正初期にかけて活躍した、日本近代の初めての女性職業作家である。彼女の作品は常に女性に関する問題を描き出してきた。それらの中では、「男女の相剋」と呼ばれる異性間の葛藤の問題が繰り返し取り扱われてきた。

先行研究のうち、特に「男女の相剋」をテーマとした作品について論じたものでは、女性作中人物に焦点を当てる傾向があるが、男性作中人物に関する評価はかなり少ない。「男女の相剋」と言うからには「女」だけでなく「男」に対する理解もなされなければならない。それゆえ、本論は「男女の相剋」をテーマとした一連の作品のうち、「木乃伊の口紅」(1913年)と「炮烙の刑」(1914年)に焦点を絞り、男性作中人物像を検討、考察した。

「木乃伊の口紅」における義男と「炮烙の刑」の慶次、宏三に関して、先行研究では、男たちの「弱い」イメージが読み取られている。しかし、それらの研究においては、その〈弱さ〉に関する詳しい説明や、いかに評価するかといったことへの言及はあまりない。したがって、本論の目的は自我を追求する女性視点人物と対関係に置かれた男性視点人物の〈弱さ〉に注目し、男性作中人物がどのような〈弱さ〉を持っているかを検討し、内実を明らかにすることであった。

第一章で先行研究の動向を把握しつつ本論の目的を設定した。第二章と第三章では、両作品における男性作中人物のイメージについて、二つの面から検討した。第一に、男性人物の自身の言動や内面描写から分かることを検討した。第二に、女性視点人物が男をどのように見ているかという面からの検討を行った。そして、第四章では大正期の男らしさと近代的家父長制の特徴を踏まえ、両作品の男性作中人物像を比較し、男たちの〈弱さ〉が「男女の相剋」の何を炙り出すかについて分析した。最後に、第五章で全体を結論づけた。

本論の結論として、まず、女性のパートナーがいるか否かで〈弱さ〉の内容が異なることを指摘した。義男と慶次の二人は妻帯者だが、彼らが「夫」であるかどうかは相手のニーズによって決まっている。それを本論では形式的な「夫」を演じていると結論付けた。また、単身者である宏三の〈弱さ〉は、自分の本当の気持ちを表現しないことや、女性の内面を推し量ることができない点に表れていると見た。次に、宏三の〈弱さ〉は家父長制的規範を受け入れざるを得ない点にも表れていることを明らかにした。一方、義男と慶次には男尊女卑観が底流しており、それが近代家父長制の特徴に一致している点で合理的だとは言えるが、彼らはこの制度にそもそも鈍感であることが分かった。男性は「男女の相剋」において女性と同じ位相にあることが難しく、その不自覚性があるがゆえに、男性は自身が窮地に追い込まれて活路を求めることも困難だということが明らかになった。